〔入選〕

—15句抄出—

火祭り

唐木和世

朝の雨こぼすひと揺れ御師の萩

富士講の膳棚に膳つくつくし

鎮火祭や溶岩裾にこゑ揃へ

神域の闇へ降りこむ秋の星

花火殻夜空のかけらかもしれぬ

幾百の灯籠に灯や祭川

先振りの声のつぶれて祭の灯

神木を闇が沈めて夜の神輿

火祭りの火が炎を煽り夜の富士

冷まじや祭の火の粉ふりかぶり

火祭りの火の列夜を貫けり

すすき祭や闇へ鳴る腰の鈴

八月の不二へ傾く草樹かな

この町の金木犀に雨あがる

吉田火祭りきのふとしたる秋の風

龍の玉

下平直子

薬袋のかさこそ鳴つて冬に入る

医通ひの花なら白き返り花

哀しみの祈りとなれり龍の玉

初冬の峡を貫く水明り

はつふゆの漣あをき山湖かな

愛用の靴の片減り翁の忌

脱ぎ捨てて冬日の匂ふ野良着かな

菜を摘むや十一月の日を零し

枯菊の匂ふや夫の入院す

咳ひとつ無き手術室前の廊

霜晴や詮無きことは考へず

茶の花や長寿の母の何も享けず

東京がだんだん遠く大根引く

風呂吹や今更酒を覚えても

花八つ手父の齢にあと三歳

子規忌

別府　優

秋蝉のひと筋ながき師の忌日
口衝いて思ひは同じ赤のまま
生るだけの数の曲がりし秋なすび
藤の実の丈に吹かるる子規忌かな
糸瓜棚裸電球垂れてをり
かまつかの視線の中にゐるごとし
下駄箱と日当つてゐる菊の鉢
藷掘りに電車の影の通りけり
枯蔓へ青年影をばさと置く
働き方改革青木の実が赤し
凩一号頬痩けしかと思ふ
蒸しタオル目に当て勤労感謝の日
学校のラッパきこゆる寒さかな
三島忌や初雪来るといふ眠り
根菜の手応へきざむ虎落笛